

近畿くすのき会第27回総会 講演会

トランペット奏者 曾我部清典氏

2023年10月22日

於 ホテルグランヴィア大阪

「新居浜と私、そして・・・」

皆さん、はじめまして。昭和46年3月に西高を卒業しました曾我部清典と申します。土居町の出身で、中学までは土居町にいました。僕の中では、中学生頃までは、松山とか高松とか岡山とかは大都市で、新居浜は中都市ぐらいな感じですが、都会の感じがすごくしまして、結構ドキドキして高校の入学式に行ったのを今でも覚えています。別子大丸に行くのを子供の頃には楽しみにしておりました。

今日はお招きいただき、ありがとうございます。ホテル関係者の皆さん！阪神タイガース・オリックスバファローズの優勝おめでとうございます。ただちょっと苦言を申し上げたいことが一つありまして、皆さん、トランペットと言うと、野球応援みたいなものをご想像なさると思いますが、今日はちょっと聞いていただきますけど、野球応援とは大分違う感じの音楽になります。そんなに爆音は出ないです(苦笑)。今日も会議が始まって最初の15分は吹くのをやめてくださいと言われてまして。全世界のトランペット奏者の名誉にかけて、そういう風評はどこかに置いていただきまして、静かなトランペットもあるということで、認識を変えてください。

さて、私は普段、楽譜を見て吹くようなクラシック音楽（特に現代音楽）を主にやっているのですが、ちょっとどんな感じの音楽をやっているか聞いてください。

CD 「今日までそして明日から・・・」曾我部清典より、佐藤聡明：HIKARI

佐藤聡明（さとうそうめい）さんという日本人作曲家の作品「HIKARI」です。光と言ってもいろいろありますが、ピアノの音はキラキラしていて、水面で光が溢れている。僕(trumpet)の光は違って、夜のローソクの炎が揺れているようなイメージで吹きました。このCDが出てから20何年たっているのですが、とても懐かしい演奏ですね。

今日はクラシック音楽とは違って、即興演奏みたいな感じでおしゃべりしたいと思います。何か質問はありますか？ちょっと考えていただいて・・・。皆さん、飲んだりはしないのですか？今からお飲みになってくださった方が良いです(笑)。飲みながら聞いてください。少しアルコールが入られた方が、舌も軽くなるというか、乾杯の前の練習ということでお願いします(笑)。

■高2からトランペットを習い 高3夏からは東京通い

高校の時の話をしますと、入学してすぐの頃、同級生は皆、賢く見えました。特に西中の子ですね(笑)。

西中の子は妙に気取っていて、標準語を喋るし(爆笑)。土居町から行くと、何となく外様感覚がありましたね。トランペットは中学で始め、西高といえば進学校なので勉強もしたんですけど、どうしてもトランペットが吹きたくなって、高校2年頃から地元の先生に習い、高校3年の夏から東京に行って、芸大の先生につきました。当時は寝台特急「せと」というのがありまして、土曜夕方、授業が終わってから東京に行き、日曜日にレッスンを受けました。レッスンは長引くと、日曜日も夜行で帰ることになって、月曜日1限の出席がぎりぎりになりましたが、何とか卒業させてもらいました。



■就職は敗北を意味する東京藝大

高校を出まして、2年ほど浪人しまして、東京芸術大学（当時はこの文字）に入れてもらいました。音楽大学は授業料がすごく高いんですよ。それは、なぜだかわかりになりますか？一般の大学ですと、1対1の授業はありません。ゼミで20人くらい、大教室だと100人くらいで授業を受けます。僕ら芸大は、専門の授業とピアノの授業は1対1なんです。ですから、人件費が高いのです。

しかも、大学を卒業したからといって、プロの演奏家になれる保障が何にもありません。芸大に入りまして、一般の大学とは随分違う状態だったと思いますが、最近、芸大に関する本が立て続けに出版されて、「最後の秘境 東京藝大 天才たちのカオスな日常」という本が注目されています。一般大学の就職率はどこでも100%を目指しますが、芸大の場合は約9割がフリーランスになります。就職するのは敗北なんです。僕らは芸術大学に入ったのだから、芸術で身を立てるのが本筋なわけです。芸術以外のことをやる

というのはドロップアウトするというか、負けになるわけです。就職するのは、テレビ局とか、出版社とか、高校とか中学とかの先生になるとか、大学院に行って地方大学の教育学部の先生になるのが多くて。あと9割は、フリーランスの演奏家になります。仕事はだいたい電話で入るんですね。当時は携帯電話がありませんから、普段はできるだけ家にいました。仕事が入ると出掛けて行って演奏しました。



■現代音楽と金管アンサンブル

そんな中から、大きく二つの団体に所属しました。一つは現代音楽を一緒にやらないかと誘われて「ムジカ・プラクティカ」という実験音楽をやる団体、もう一つは同級生で結成した金管アンサンブル「上野の森ブラス」に入りました。それも聞いてください。ルネサンス時代、バッハとかが出てくる前の民衆歌（マドリガル）の編曲です。

CD 「ブラスアンサンブルの楽しみ」上野の森ブラスより、トーマス・アーン：どれが歌によい日？

「上野の森ブラス」は、一時は NHK とかにも出していただき、業界では少しは有名になりました。結構、海外にも演奏に行きました。その時の面白い話をいくつか紹介します。

インドのコルカタ（カルカッタ）で演奏した時に、電力事情が悪いものですから、ホールが演奏中に停電になって真っ暗になったんですね。僕ら5人は、楽譜を全部覚えて暗譜して演奏していたものですから、途

切れずに演奏をし終わりました、そうしたら会場からわっーと拍手が起こり、それをよく憶えています。

タンザニアというところに行きまして、地元の新聞社とかテレビの取材があったのですが、面白い質問がありました。「お前たち5人は、同じ部族か？」と。ヨーロッパ（ドイツなどでも）では、森の中には野獣が住んでいます。アフリカなんか、猛獣がいたりするんです。すると人はまとまって住んでいるのです。それらの交流がないから、部族同士で近親結婚みたいなことが行われ、顔がそれぞれの部族で違うんです。僕ら5人の顔を見て（風貌が違うので）、「お前ら同じ部族か？」と聞かれたことがありました(笑)。

たまたまマダガスカルに行った時は、大使が今治市出身の方で、結構かわいがってくれて、お酒を一杯注がれまして、酔いつぶれたようなことも憶えています。



ところで、何か質問は浮かびましたか？

■自分の耳にしか聞こえない音楽

Q・肺活量が必要ですか。腹筋とかが必要ですか？

肺活量は、僕は2800CCくらいしかありません（大きな肺活量は特に必要ではない）。腹筋、背筋は使っていますね。呼吸が非常に大事になってくるのですが。皆さんでちょっと腹式呼吸法をやってみましょうか。（会場と一緒に腹式呼吸法をやる）お風呂上りになどやってもらえると、健康になります。

音楽というのは、実際に人間の耳に聞こえるものですよね。もう一つ遊びたいのですが、『耳の音楽』を皆さんに演奏してもらいましょう。手を耳にあててください。ちょっと手を動かしてみてください。なんか、シャカシャカという変な音がしますか？自分以外、誰にも聞こえない耳の音楽を今から各自1分間演奏してみてください。両耳だとステレオ効果があります。早く動かしたり、ゆっくり動かしたり。強く動かしたり、弱く動かしたり。叩いてみたりしてください。これも一つの音楽なのです。

■音楽って何だろう？

音楽って何だろうと思う時、アメリカにジョン・ケージ(John Cage)という作曲家がいて、「4分33秒」という曲があるんですけど、ピアニストは椅子に座って、蓋を開けて何も弾かずに蓋を閉める。これを3回やるんですね。無音の音楽なんですけど。演奏行為というものと出る音。例えば、こんなことがありますよね。皆さん、森の中を歩いている。すると、鳥の囀りが聞こえたり、木の葉が揺れたり、川のせせらぎが聞こえたり、「ああ何か癒されるなあ」ってそれを音楽として聞くことがあると思うんですけど、これも一種の音楽であろうということなんです。1曲、ジョン・ケージの音楽を演奏したものがあって、聞いてみてください。これは「龍安寺」って曲なんですけど、ご存じのように、京都の石庭ですね。石庭には、十何個の石が置いてある。ケージは、石のカーブの線を描いてそれを楽譜として作品にしています。これもトランペットの音です。自作のゼフェロス（元はギリシャ神話の偏西風の神様の名前）と名付けた楽器で。トロンボーンのようなスライドが付いています。これも音楽です。

CD 「透明な孤独」曾我部清典より、ジョン・ケージ：Ryoanji（龍安寺）

■武満徹さんの「P a t h s」

この辺で、1曲吹いてみようかと思います。武満徹さんという方をご存じでしょうか？もう亡くなりましたが、日本の現代音楽のトップを走られた方です。この方は独学なんです。作曲って大学で学ぶものでもなかったりするんじゃないかと思ってしまいます。この方の書いた「P a t h s」径(みち)という曲です。室町時代に発達した回遊式庭園にアイデアを得ています。庭園の小径（こみち）を歩いていくとどんな風景が見えるでしょう？これはハーマンミュート（弱音器／マイルスデイヴィスの音と思うと、想像できるでしょうか？）という物なんですけど、ミュートをつけて吹くのが遠くに見える景色、離れたのが近くに見える景色です。歩いていくと、最初遠くに見えていた景色が近くなったり、近くにある景色が遠くなったり、そんな感じで曲が進んでいきます。この曲はもともと、武満さんの友人で、ポーランドにルトスワフスキーという作曲家がいて、その方のメモリアルとして、この方のお葬式の後の偲ぶ会で演奏するために書かれました。

<演奏> 武満徹：径（みち）



■トランペットに感じた魅力

Q・中1からトランペットを始めたということですが、魅力を感じたきっかけはありますか？

土居中に入りまして、運動は好きだったんで、野球部かサッカー部か、4月は悩んでいたんですね。野球部はどうやら先生が怖いらしい(笑)、僕は短距離は得意でしたが長距離が全然だめで、サッカー部はへとへとなりそうなので、サッカー部もやめて(笑)。卓球やテニスには、チャラいなあって(爆笑)。その時に吹奏楽部は、何かあると皆が授業を抜けてバスに乗って出かけていくんです。それで、これだったら授業をさぼれるなあって(笑)、吹奏楽部も良いなあって思っていました。うちの近所のすごく体格のいいトランペットの先輩が部長をつとめていて、音楽室に引っ張り込まれて、「おまえ、どれでもいいから吹いてみろ！」と言われ、トランペットを吹いたら、そこそこ音が出て、これ面白いなあ！と思い、入部しました。当時、

先輩の練習は午後6時くらいに終わるんですけど、へたくそな1年生だけは、夜8時くらいまで吹いていましたね。良い時代でした。

Q・楽器を作られていると聞きましたが、なぜ、トロンボーンではなく、トランペットを改造しようと思ったのですか？

その答えは簡単でして、トロンボーンとトランペットは、吹くところ（マウスピース）の大きさが違って、僕は、同じ金管ですけど、トロンボーンは吹けないんですよ。音域も1オクターブ低いんですね。トロンボーンみたいな、ぬーとした音（グリッサンド）を出したいと思って、最初は名古屋の楽器屋さんに相談したら作ってくれました。良い楽器だったのですが、ベルがすごく小さい。次にヤマハに持ち込みまして、管楽器アトリエ（プロ専用のセクション）に作ってもらって。それも良い楽器だったのですが、ベルの部分がまだ小さくて、大きな音があまり出なくて。ベストブラスというヤマハを独立した方がいて、普通のトランペットのベルで作ってもらいました。もう一つ、グローバルという会社がありまして、「楽器フェアで技術者の腕をアピールするのに作ってみました」といただきました。いま少しずつ仕様が違うものが3台あります。ここにピストンがあって、左手でトロンボーンみたいに引いて音を変える。先ほどの演奏「龍安寺」はこれで吹いています。

作るという意味でもう一つ見ていただきたいんですけど、これミュートというんですけど、聞いてみてください。単に筒に穴をあけて、脂取り紙をつけたものだけです。すごい音がするでしょう。ディストーションギター、エレキギターみたいな音がします。製作費は3000円くらいです(笑)。

現代音楽の世界では、「異化」という言葉があります。同じようなものを少し見方を変えたり、同じ曲でもバラバラにして組み立てたり、元の意味ではないものを作り上げる手法があり、それを異化と言います。現代音楽の中で12音技法という音楽があるけど、他にもいろんなことを試しているんですね。僕ら演奏家は、先生に習ったことを、そのまま完璧に先生に近く演奏できるようになれば、そこそこお仕事がいただけるようになるけど、作曲家って、それではダメなんですね。どっかで聞いたような曲を作っただけでは、二番煎じって言われるわけです。だから、彼らはもっともっといろんな音楽の世界を追求していると思います。



■ 音楽に世の中を変える力を

コロナの時（2020年）は、2月20日に名古屋で演奏会をやって、その後、10月まで何にもなかったのです。全部中止です。音楽家を殺すには刃物はいらぬ(苦笑)。

僕は本番がないと本番の体にならないんですね。いくら家で練習しても、何か違う。野球選手とか運動選手とかも皆そうだと思いますけど、練習でうまくいっても、本番はうまくいかない。脳にスイッチが入ったりするんでしょうね。

昔は音楽（芸術）というのは、日本だと花鳥風月を愛でる芸術が主流だったと思いますが、今思うことは、音楽に世の中を変える力を与えたいなあって。そうなってほしいなあって思っています。昨今、一つは、ウクライナの問題がありますよね。一言では片づけられないと思います。プーチン大統領も悪いんですけど、その前に長い歴史があります。

その最たるものが、ガザ地区ですね。ユダヤの人達は、ユダヤの教えに従って、ユダヤ教を広めに世界に出ていくわけです。世界中でユダヤ教なりキリスト教を広めていく、そういう使命を持って、ユダヤを出たわけです。今のイスラエルですけど。そして第二次世界大戦が終わって、自分たちの国を作りたい、どっかに棲み家を作りたい。それをアメリカが認めたんですね。そこにはイスラムの人たちが住んでいるわけです。今日から、新居浜市はイスラエルのものだよと言われてたら、皆さん、どう思われますか？そんなことありえないですよね。イスラエルの人たちは、2000年前は俺たちの土地だったんって言うんです。落としかどころが絶対ないじゃないですか。逆に言うと、イスラム教だろうが、キリスト教だろうが、ユダヤ教だろうが、そんなことを言ったら絶対解決しないお話だと思います。

そんなことを思って、ヘブライの弔いの歌『カディッシュ』を吹きます。モーリス・ラヴェルというフランスの作曲家が作曲した曲です。とにかく全世界が平和にならないことには、新居浜も東京も大阪もありませんので、そういう風になればと思います。

<演奏> モーリス・ラヴェル：カディッシュ（2つのヘブライの歌より）演奏

■土居に里帰り 故郷は良いですね

この講演の後、名古屋でリハーサルを二つやります。11月に名古屋で二つコンサートをやりますので。一つは、ジョルジ・リゲティというハンガリーの作曲家が生まれて100年になります。それを記念して、リゲティのお弟子さんらの作品を演奏します。もう一つは、豊田市小原地区は和紙の里なのですが、和紙の作家の方のお庭をお借りしまして、山からお月さんが昇ってくるんですが、それに合わせて演奏するそんなコンサートをやります。（チラシを見せる）

そのリハーサルが終わりましたら、土居町に帰ります。両親は亡くなりましたが、家と少しばかりの畑と庭があり、植えている作物の様子を見に帰ります。無農薬・無消毒・不耕作のズボラな野良仕事です(笑)。皆さん、新居浜には、時々、お戻りになりますか？故郷は良いもんですね。

最後に、皆さんのお世話で働いてくださった実行委員会の皆さんに1曲プレゼントしたいと思います。これはピッコロトランペットといいます。これは歴史の新しい楽器でして、僕が生まれた頃に作られた楽器です。もとはバッハとかバロック音楽を演奏するために作られました。バロック時代の曲で「トランペットボランタリー」という曲です。ボランタリーには、ボランティア（奉仕活動）の意味もありまして、今日の実行委員の皆さんにプレゼントして、私の講演を終わりたいと思います。

<演奏> ジェレミア・クラーク：トランペット・ヴォランタリー 演奏

拙いお喋りにお付き合いいただき、ありがとうございました。

（文責・入江）

【曾我部清典氏のプロフィール】

1952年（昭和27年）生まれ。土居小・土居中を経て、1971年（昭和46年）に新居浜西高を卒業。1977年（昭和52年）東京藝術大学音楽学部を卒業。藝大在学中から近藤譲監督の現代音楽アンサンブル『ムジカ・プラクティカ』の主要メンバーとして活動する。一方、藝大卒業後、同期生が結成していた『上野の森ブラス』に合流し、コンサートマスターを務め、NHK-TVなどにも数多く出演した。上野の森ブラスは、今年で結成50周年になる。

また、全国各地で現代作品を中心としたソロ・リサイタルも開催し、2001年を皮切りに複数回ヨーロ

ツァーを行い、ロンドン、パリ・ブリュッセル・ローマ・ケルン・ベルリン・カイロ・テルアヴィヴなどでソロ・リサイタルを開催し、好評を博した。70歳を超えた今も、トップソリストとして演奏活動を行っている。音の可能性を広げるために、新しい楽器や音具の開発にも力を注いでおり、中でもスライドつきトランペット「ゼフェロス」は、多くの作曲家の注目を浴び、この楽器のための作品も生まれた。

洗足学園音楽大学講師、茨城大学教育学部講師としても、後進の指導にあたり、合宿形式のワークショップ『トランペット未来塾』を全国各地で開催、演奏家養成と若者の育成に取り組んでいる。日本トランペット協会常任理事。プラクティカムジカスタジオ／曾我部ミュージックパブリッシング代表。野口体操同好会「のの会」主宰。

